

## 齒

## 水谷啓 二

順調に行けば——禿は、三角形の鏡の破片に肉太い大きな鼻をつき出しながら考へた。——後一年で俺も大學を卒業するんだが……。そして兩方の拳の先で鼻頭の脂肪を絞り出した。二三日毎にかうして絞るのである。脂肪の出たあとが幾つかの微細な孔になつてゐた。いらいらして指先を机になすくりつけると、今度は齒をむき出した。血の氣のない黒ずんだ唇と神經質に光る石灰質の齒が鏡を占領した。そして楊子で齒齦をつつ突き出した。褐色の血が滲み出た。

彼は鏡を買はうとは思はなかつた。顔全体を見るのは癩だつたから、脂を絞ると、齒齦をつつくには三角形の鏡で充分足りた。そして齒をむき出しながら考へるのである。

脳下垂体分泌多ぢやないかな？ 禿は鏡をぐるぐる顔の前に移動させながら頬を押へた。青いむくんだ顔だつた。鼻のつけ根から唇の兩はしに切れ込む皺が固定した皮肉な表情を形づくつてゐた。人前に出ると尙皮肉な表情になるのである。流動性のない禿の顔は、厚い脛の底に沈んだ眼の油の表面の様な執拗な光と關聯して、程度の差はあつても何時も皮肉な表情をしてゐると言つてよかつた。口も開けて放心した様を茫漠とした顔付をする時は別だが。

彼は皮肉な氣力の無い人間だつた。友人などの前に出ると急に皮肉な感情で障壁を作つてしまふのだつた。無意識的に、しかし彼は小心な臆病な人間でもあつた。他人から疑はれると彼の胸は急にさはぎ出した。以前の屈辱的な記憶を思ひ出すと、發作的に頭をかゝえて斷定的な連絡のない言葉を演説口調で吐き出す奇妙な癖を持つてゐた。勿論自分では何を言つてるのか意識してはゐない。自分の全く無意識的な口の運動から吐き出される音が、聽覺を通じて腦を自失から引き戻す時その音が時々完全な

一つの意味を形成してゐるのにひどく驚く事があつた。

突然梯子がぎいぎい鳴り出した、禿はこの音を病的に嫌惡してゐた。肛門から後頭へ、と突き抜ける様に感ずるのである。下宿のおかみが隣の婆と喧嘩する聲によく似てゐると思つた。

「お手紙で御座います。」

おかみが顎から上出して封筒を投るとそゞくさ闇の中にすべり込んで行つた。禿は鏡を投げ出した。女からの通り一遍の返事だつた。それを机の上に投げ出すと仰向けにひっくり返つた。醫學の事でも考へて見やうとしたけれどもニコチンで荒れた舌の様にかすかすした頭脳には何も浮んで來なかつた。彼は女の事を考へ出した。

俺は彼女に戀してゐるのかな？返事が來ないといらいらすから戀してゐるのかも知れない、しかし……。

彼は引出しから寫眞を取り出して見た感じのいい廣い額から豊に細つて行く、幾分古典的な感じがしないが上品な顔の輪廓みづ／＼した顎の肉唇の端を初々しい乙女らしいものにする軟かな肉のしまり、陰影は強いがしかし少くもするどさのない顔全体の感で、伏せた眼のやはらかな落着き。それは典型的なするどい理智のとげとげした美ではない。やはらかな可愛さだ禿は光線を脊に向ける爲仰向から横向に轉りながら考へた。こんな美しい女性と戀愛關係にあるなんて實際素晴らしいではないか。そんな事を無理に考へて見たけれども別に氣も引立たなかつた。ふと彼は腹が立つて來た。俺は氣力がない情熱もない。女に對してまでも卑屈な感情を抱かねばならぬのかと思ふと彼は急に狂暴な淋しさを感じ出した。

急に彼は女の顔にどうしても缺點を見出さねばといふ病的な執着に執はれた。そして寫眞を鼻先に近づけたり遠ざけたり始めた。缺點を見出す事が彼の皮肉な慾望を満足させる爲か或は無理に女にけちをつけて彼女の價値を引下げる事によつて、彼女を想起する度に胸にわきおこる卑屈な感情を逃避したいといふ氣持からか。

かん骨が出てゐる！ さう獨言をいふと彼の胸が子供らしいよろこびと安易を感じ出した。といつて彼女の美しさが彼の美感に對する魅力を減じたわけではない。彼は確に無意識に自己を瞞着してゐた。何故ならかん骨が出てゐると言ふよりかん骨に乙

女らしい肉のしまりのある事は特殊の陰影とあどけなさを構成してこそをれ缺點とはなつてゐなかつたからである。今度は唇をしらべ出した。下唇の真中のくくれた上品な唇だつた。この唇の下にどんな歯があるだらうか、彼はまた彼女の歯を見た事がなかつた。つまり一度も彼女の笑顔を見た事がなかつた。それほど接近した間柄でもなかつた。會つて見ても變なまじこちなさそぐはない不安定な氣持を感ずるのだつた。

彼女の笑顔今迄見なれた幾分暗い感じのするつや消しにされた陰影が微動してゐる様な顔が忽ちぎらぎらした光輝を發するかもしれない彼女の笑顔を見たいといふ慾望がないではなかつたが、しかしその光輝の前に彼自身が卑屈な收縮を感ずるかもしれないといふ豫感があつたので内心恐れてもゐた。

急に腹が寒くなつたので禿は起き上つた、くさみかもやも鼻の奥に突き上げて來たので間の伸びた顔をして、息を吸ひ込んだが爆發せずは何處かへ消えてしまつた。ふと煙草を買つて來なかつた事を思ひ出した、すると急に煙草がほしくなつた。火鉢の灰を掻き廻して見たら小さな吸さしが出て來たので大事相に吸口へのつけて吸ふと舌の上に灰がざらざら落ちて來た。感官の嫌惡を舌端に集中してべべつと火鉢の中に吐き込むと灰かぐらがやけに舞ひ上つた。

買つて來やう、さう思つて垂直に近い暗い階段を下りた。横向きになつて降りるのも嫌だつたので反りかへる様にして降りるのである。夜の暗い時なんそよく錯覺を起した。もう一段あると思つて足を下した時其處で段は盡きてゐた爲に地面が急に浮き上つて來て足を打上げる様なおどろき、或はもうおしまひだと思つて下す時床が足と一緒にすうと陥落する際横隔膜のあたりに感ずる狼狽を常に經驗せねばならなかつた。出やうとすると西村が立つてゐた。

「何處かへ行くんぢやないか？」

「いや煙草買ひに行かうとしてゐたところだま上り給へ。」

「ほ、えらい物を持つてるな。」

西村はすはりもせずにもせすに机の上に身を屈めた、机の上には大きな醫學大辞典が傲然と構へてゐた。禿は大きな辞典をかざり立て

てお前は研究せねばならんのだぞといふ威嚇を常にそれから發散させさうだ、俺は研究せねばならんのだといふ反應意識を摘發しやうといふ子供らしい悲しい詐欺にすぎなかつた事を思ひ出して自己に對する憤怒と屈辱感がこみ上げて來た。それが急に空虚な淋しさに變形すると胸一杯にしみひろがつた。そして苦い顔をした。

「君、村岡と和睦せんかい？」

「馬鹿な。」

禿は齒をむき出して村岡が眼の前にも居る様な皮肉な表情をした。

「時に奴、後で何か俺の悪態でもついたらう？ 言つてしまへよ。」

「インポテンツの氣狂ひと言つたよ。酔狂して言つたんだ氣にかけるなよ。」

「氣狂ひか。」

禿は笑はうとしたが頬の肉が妙にこはばつた。そしてこのあちこちにほつつき廻つて何もかも喋つてしまふ西村に嫌惡を感じ出した。

「おい西村俺の髪の毛を引張つて見い。」

西村は間の抜けた顔をして禿を見た。

「どうするんだ」

「かうな、指の股をひろげて鷲掴みにして、きつくもなくゆるくもない程度に攔んで引張るんだ。」

「何する。そんな事して。」

「何でもいゝ、引張るんだ。」

「かうか？」西村は禿のばさばさした地のすいて見える髪の毛の中に手を突き込んだ。「痛くないかい？」西村は引張つた手を開いた。指には髪の毛が五六本捲き付いてゐた。

「早老だよ」禿は何か言はうとして居る西村の口の上におつかぶせる様に言ふと爆發する様にあはあは笑ひ出した。わーんといつた様な空な反響をひき起す低音ときやらんと瞬時に神経質につきもどすあの亂雑なガラスの破片を安つばいコンクリートにつきあてる様な乾燥した金屬性の聲が不調和に交錯した。禿は苦苦しく黙り込んだ。西村は堪へ切れない様な皮肉な沈黙を破らうとして何か話題を見付けやうと焦つたが何もなかつたので立上つた。

西村が歸るとやはり少しは淋しかつた。何故追ひかへしたのかなと自分を責むる氣にもなつた。禿は又三角形の鏡を取り上げながら村岡と數日前口論した事を考へた。村岡といふのは禿と同じ高等學校出で禿が最も嫌悪し恐怖してゐる人間だつた。彼ののしかゝる様な体格の前に出ると、不安な壓迫と病的な憎惡を感じるのだつた。二三日前同じ醫學部内の同校出身の會をやつた時の事である、禿が酒の勢をかりて村岡を侮蔑的に皮肉くつたのである。すると村岡が眞赤になつて立上ると右手を振りながら奔流の様に罵つた禿も頭が旋回してゐたので村岡が何と言つたかよくは覺えてゐないが村岡が次第に青ざめて落着ながら次の様に言つたのを覺えてゐる。

「貴様の皮肉が何だ、貴様は人を皮肉くつてえらい自分が高揚された氣持でゐるのかもしれないが馬鹿な。貴様は自分で穴掘つて頭をつつ込んでゐるんだ。ちつばけな殻の中に萎縮してゐるんだ。そんな陰險な下劣な皮肉はな、貴様みたいな不具的な頽廢的な人間が強い人間に對して本能的に持つてゐるひがんだ卑屈な武器に過ぎないぢやないか。」

禿は自分の頬が冷却して行くのを感じた、彼は何か言はうとしたが壓搾された様な低いうめきが漏れたきりで言葉にはならなかつた。彼は安つばいヒロイズムからと臆病な恐怖をおし包む爲に唇の兩端をぐつと引下げて笑殺しやうとした。がぶるぶる震へる唇は彼の意志に従はなかつた。彼は憤然として席を立つた。少くとも自身では憤然たる身振りを示したつもりだつた。

「おいさうむきにならんでもいゝぢやないか、お造酒が上つてゐるんだ。」

西村が彼の前に立塞がつてやたらに壁を塗る様な手つきをした。彼は一層我を張らぬ譯には行かなかつた。彼は西村を引摺りながらドアの把手を握つた。

「困るなあ。」

西村の酒腫れのした顔が泣き相に皺んだ。

「何も君が困る必要はないぢやないか。」

西村もむつとしたりしく手を緩めた。禿は西村がのめるのをちらと見ながらドアを叩きつけた。彼は冷たい石階を降りながらわは、あは、あは、と村岡のだみ聲が反響するのを聞いた。野獸の筋肉を聯想させる様な豪放な笑ひだつた。幾分作り笑ひの自然さはあつたが、それに交つて西村や二三の者の笑聲が交錯した。自分から交友をさけてゐる彼ではあつたが今あからさまに擯斥されて見ると空洞に石を叩く様な空虚な寂寥に打のめされた。

禿は鏡を投げ出して皮膚をおし上げて隆起する力もない血管の底に黒ずんだ手でふけを掻き立てた、そして鹽辛い唾液を吐き出した、さうだ村岡の言つた事は眞實だ俺は憐むべきひがんだ臆病者なんだ。悲憤に近い感じが狂暴な嗚咽となつてこみ上げて來た、急に禿は投げ出してあつた枕に噛みついてうなり出した。重力のない闇に狂ひ廻つてゐる様な自己がみじめな存在に思へた。

禿は眠れなかつた。かなり夜も更けてゐた、電燈を消すと、闇黒が胸を絞め付けるのでつけつ放しにしたまゝ、寝てぼんやり天井を見つめてゐた。すると、何時もの様に天井の骸骨が彼を惱まし始めた。

天井の丁度彼の目の眞上のところに労働者らしい幅の廣い足跡が踵だけ消えてくつきり残つてゐた。二つの節穴と雨もりの汚黴らしい跡がこの足跡と一緒になつて、いくら足跡だと彼の心に言ひ聞かせて見てもそれは變な頭蓋骨にしか見えなかつた。指のあとが抜けかゝつた齒に見えた。尤も節穴は二つで左の目と、鼻の穴になつてゐて右の目は無かつた譯だが、錯覺から彼の目には右の眼窩がくつきり出來て來るのである。そして不完全な輪割が完全な輪割となつて浮き出して來るのである。

數週間前迄は足としての壓迫は感じてゐたけれども頭骸骨とは見えなかつた。それが彼が悪夢から醒めて天井を見た時その夢と骸骨に何の關係があつたのかわからないが、骸骨に見出したのである。彼はよく夢に苦しめられた。黒い奇怪な男と、高い

所を歩いてゐた。山の上か高いビルディングの上かわからない。

「下を見ろ。」

黒い男が言った。村岡の聲に似てゐた。見渡す限り穴だつた。

「何といふ無数の穴だ！」禿は髪根を絞め付けられる様に立ち竦みながら叫んだ。

「何といふ無数の煙突だ」急に穴がみんな煙突に見え出した。煤煙、響音、號笛、水蒸氣そんなものが腫れながら湧き上つて來た。

「違ふ。あれは煙突ぢやない。あれはみんな口だ！ 死んだ煙突ぢやない。みんな絶叫してゐる口だよ。嗷嗷が聞えないか。口の動きが見えないか！」

黒い男が氣狂ひの様に絶叫し出した。なるほど無数の口に見え出した、一齊に仰向いた無数の口は瀕死の魚の様に口をばくつてゐた。そして一つ一つ別々の事を喚いて居るらしかつた。わーんと湧き上る響が彼の全身にかすかな微動となつて感ぜられた。今迄無数に見えた口がくつつき出した、接觸すると忽ち引き伸ばされたアメーバの様になつて吸込まれた。そして一つの大きな口になつたそれが前後に地をおほふ様に廣がり出した。そして擴がりながら浮き上つて來た。禿は全身の毛穴の收縮するのを感じた。足場が急に崩れ出した。後しざらうとしたが動けなかつた。首筋に壓迫を感じたので振返へると村岡がのしかゝる様に彼の首をとらへてゐた。

「村岡、貴様は俺を……」

押へ付けられた喉の間から泣く様にうめき出すと禿の体はがらくたと一緒に口の中へ轉落して行つた。大きく振られた村岡の腕を一瞬の中に網膜に収めながら。

彼は大きく息を吐きながら幻覺から醒め切れない様にぼんやり天井を見上げてゐた。その時からである天井の足跡が骸骨に見え出したのは。足跡だ。足跡ぢやないか。いくら言つても骸骨にしか見えなかつた。横を向いたり眼をつむつたりしても引き付け

られる様に視線は天井の汚點に集中するのである。禿は起き上つて火鉢を掻き廻して見たが星の様な光が沈んでゐるだけだったので、布團を反對に引廻してもぐり込んだ。そしてちらりと天井の汚點を斜に見たら唯の足跡に見えたので安心した。ふと彼は昨夜の夢を思ひ出した、禿は寝る時に前の晩の夢を初めて思ひ起す事が多かつた。昨夜は夢は見なかつたかなとその朝は思つても夜寝て見ると思ひ出すのである。そしてそれが夢とも幻覺ともつかないものに連結して行くのであつた。

闇の中に狂ひ廻つてゐた、光も音もない闇の中だつた。彼は喚いて見た、しかし其の聲は瞬間に闇黒の中に吸ひ込まれて音にはならなかつた。恐しい恐怖が湧き上つた。禿は無茶苦茶に走り出してゐた。少しでも高い所へ登らうと焦りながら。彼ははるか彼方に微細な光らしい物を見付け出した。彼は狂喜した。氣狂ひの様に走り出した。がいくら走つても光は近くならなかつた。そして愈々遠ざかり出した。そして闇の中に吸ひ込まれた、禿の眼に縁を帯びた黄色い錯覺だけが残つた。それでも走り續けたがやがて棒の様にぶつ倒れるとごろごろしてゐる石に抱き付いて號泣し出した。

禿は闇い小陰を歩いてゐた。山陰に淵が何かの眼の様に圓く澄んでゐた。あの淵の底に寝たら氣持がいいだらう。禿はさう思ふともう飛び込んでゐた。禿の体が仰向けに水平に沈み出した。下から見上げると、水面が鏡の様に銀色に光りながら無限に廣がつてゐた。そして彼の飛び込んだ個所から波紋が銀線を畫きながら伸びた。一ヶ所金色にきらきら光つてゐるのは太陽の當つた所だらう。禿は沈みながら、こんな事を考へた。鏡面が次第に遠くなり出した。暗くなつて來た。禿は沈んで行く自分の体が靜止してゐて、鏡面が逃げて行くんぢやないかなと思ひ出した。ぬるぬるした暖いものが脊中をなでた、禿は底の泥の上に寝てゐた。かうして寝てゐると自分獨りが人間世界の進行といふものから除外されてしまつてゐる様な氣がした。俺は生きてゐるのかな？此處は水の中だと思ふと本當に息苦しくなり相な氣がした。遙か上方に銀の様に靜止してゐる水面が本當に固体であつて、浮き上らうとする彼の頭にこつんといふ打撃を與へるに違ひない、すると彼はもう再び光と騒音の世界に出る事は出来ないのぢやないかといふ恐怖に胸を咬み絞められた、そして夢中で泥を蹴つた。泥は彼にはね上る彈動を與へる代りにぬうと彼の足を含んだ。彼は浮き上らうとしても掻き出し。たそして無茶苦茶に泥を踏んだ。泥が雲の様に湧き上つて体を包んだ。彼は必死の努力



で泥の雲を抜け出すとなめくちの様に鏡にへばり付いた。鏡だ。ガラスではない。鏡一枚隔ててある筈の外界が見えない。俺自身も寫つてゐる。たしかに俺に違ひない、鼻の先の穴まで寫つてゐるから。しかしあの三角形の鏡で部分的に見做れた自分を行う全体として見ると、奇妙な疎隔と珍らしさを感じた、輕蔑と嫌惡が湧き起つた、皮肉を投げ付けてやりたくなつた、すると俺は自分が村岡の言つたのと同じ言葉をはうとしてゐるのに氣付いた、さうだあれは俺だ。俺に違ひない。俺はこの鏡を突き破らなければならぬ。彼は鏡を叩き出した。鏡の中の自分を殴り出した。鏡の中の彼が彼を殴り出した。彼等は激しい争鬪を始めた。

禿は鏡の中の男を殴り倒した。俺は勝つた。しかし俺から殴り倒された奴は誰だ、あれは俺ではなかつたか、すると俺は誰だ俺は何故こんなに恐怖を感じなければならぬのか。あんな輕蔑すべき俺が死んだつていいではないか。しかし立つてゐる俺は誰だ、禿は戰慄しながら死んだ人間の顔を覗き込んだ、そして飛上つて絶叫しだした。村岡だ！俺ではなかつた。俺は勝つた。俺は村岡に勝つたのだぞ！俺は勝つたんだ。

ふと村岡が生きてゐるのではないかといふ不安が横隔膜をひたと靜止させた。彼は村岡の頭を引き起して見た、瞬間村岡の眼がわんと見開いた。彼は其の眼から激しい力の壓迫を感じた。彼は恐怖と驚愕に收縮した。村岡は生きてゐる、手が動く。何といふ大きな手だ。村岡の体が眞黒な陰翳となつて擴がり出した。手が大きな指が俺の喉を掴む。

「村岡許してくれ、俺はお前だとは思はなかつたんだ。俺はお前を殴り殺したつもりではなかつたんだ、俺は俺を殴り殺したつもりだつたんだ。その手を外してくれ！俺の喉を緩めて呉れ！」

彼の顔の穴から涙とうめきがごつちやに絞り出された。

「だから俺がお前を絞め殺してやるんだ。」

村岡の黄色い凶暴な齒が見える！

「嫌だ、嫌だ。俺は死ぬのは嫌だ。俺はする仕事があるんだ。大地にしがみ付いて俺は其處から何か掘り出さねばならないんだ。」

緩めて呉れ、殺さないで呉れ。俺は死ぬのは嫌だ！」

禿は布團をはね退けて起き上つた、赤茶けたそれでゐて神経質な冷い堅さを持つた電燈が目にしみた、またゝきすると尙痛かつた。目を擦りながら恐怖が落ち着くと無氣力なそして絶望的な悲憤がひろがり出した。俺は何故にこんなに村岡を恐れなければならぬんだ。

翌日彼はぼんやり机の前に尻を据えてゐた。西村の所へ行つて見やう、ふとさう思ふと立上つた。西村は居なかつた。奴、研究室に閉じ籠つてやつてゐるんだな。と思ふと輕蔑と畏怖と焦慮があはたゞしく彼の胸を壓搾し出した。彼は家へ歸ると本を引張り出した。そしてページを繰つて見たがそれは單に文字の羅列として映るだけで意味にはならなかつた。彼の腦に視覚と、思考の間に何か薄い膜があつて、彼が思考に突き入るのを食ひ止めてゐるのぢやないかと思つた。そしてそれを突き破らうとする様に食ひ入る様子を文字を見つめたけれども駄目だつた。彼は髪の毛の根を搔きむしり出した。そして落ちて來る髪の毛を手の間に丹念に列べた。いらいらして髪毛を吹き飛ばすと彼は抽出から女の寫眞を取り出した。彼は目をつむつた。そして相當の努力で女の姿を描き出して見た。そしてその女を、その女の肉体をとらへ様と努力して見た。けれども、何だか、彼女が空間的な存在を持つてゐない様で白いすき透つた光として存在してゐるだけで、空間と彼女の体が夢の様に融合してゐて彼の觸覺にといふより視覺にさへも實體といふ感じを起させなかつた。

俺は彼女に戀しやう。そしたら頽廢的な闇黒から生き上る事が出来るかも知れない。少しは生氣を感じるかもしれない。彼は彼の何處かに潜在してゐる筈の女に對する愛着といふより戀に對する愛着を搔き立て様と焦り出した。俺は彼女を愛してゐるんだ。と彼は心の中で萬遍なく繰り返して始めた。彼女は純真な美を持つてゐる。体全体をめぐる光のかすかな波動がのぞいてゐる様な唇を持つてゐる。實際彼女の唇は素晴らしい。俺は其の唇から光の波動と生命の波動を吸ひ込むんだ。さう考へてゐると彼女に戀してゐる氣持になつて來た。彼女は俺を愛してゐるだらうか。愛してゐないだらう。が嫌つてゐない事はたしからしい。そんな事はどうでもいい。俺は戀すればいいんだ。とに角彼女に會はう。そしたら彼女に對する愛着が湧き起るかも知れない。

彼は手紙を書いた。そして讀み返して見た。それは單なる修辭ではなくて、ひどく眞實が籠つてゐる様に思へた。

それから數日後彼は彼女に會つた。日本間に火鉢を眞中にして向ひ合つてゐた。彼はかうして向ひ合つて坐つてゐるのに變な不自然さを感じた。彼女が彼の言ふまゝに言ふ所に出掛けて來たといふ事が既に妙に奇蹟めいた事に考へられた。二人共黙つてしまふと彼は變なごちなさそぐはなない不安定な氣持を感じるのだつた。そして何に對する焦燥かわからない焦燥が彼をせき立てた。彼は其の沈黙を破らうと努力するのだがその努力が彼の心に壓迫となつてのしかゝつてゐた。そして火鉢の上で組んだりほぐしたりしてゐる彼女の指を落着きのない氣持で眺めてゐた。袖口からむつちり出た彼女の手が火氣にあつた處だけ赤く浮き出して兩端に白く褪せて行つて、微細な生毛が輪郭をわづかにぼかしてゐた。彼は自分の血の氣のない、かすかすした手を並べてあぶるのも氣詰りに思へたので股の間につつ込んで、うつ向いた彼女の唇の兩端の間のしまりの繊細な動きを眺めてゐた、何か言はうとした口を動しかけたが何も言ふ事がなかつたので黙つてしまつた。彼は卑屈に收縮して行く自分が癢に觸つた。彼は自分の体に努力して集めておかうとした氣力が發散してしまつて後には槽ばかり残るんぢやないかと思つた。じめじめした憂鬱が蝕み始めた、彼は何か言はなければと焦燥を感じた。

「實際あなたは美しいですよ。」

言つて下手な事を言つたもんだと苦々しく思つた。別に自分の感情を偽つた譯でもないが、言つた時の氣持が言葉を苦しい不自然なものにしてしまつてゐた。

彼女は幾分てれ氣味に間の抜けた笑ひを見せた。彼は始めて彼女の笑顔を見た。彼は見るべからざる物を見た様な氣がした。彼の視線は目的を失つて、あはたゞしく襖に沿つて走つた。彼女に對して氣の毒な事をしたといふ意識が働いてゐたのも事實だ。彼女の笑顔はぎらぎらした光輝を發する様なものではなかつた。彼の幻視癖から作られた全体にわたる美の旋律も消えてしまつた。輝しい光の光源となる様な齒は存在しなかつた。厚い齒齦から存在を壓迫された様な齒は暗い間隔を残して不規則に一個一個の存在を無理に主張してゐる様に立つてゐた、あどけない乙女らしさとして見てゐた顎の下ふくらみは頬の肉と一連になつ

て垂れ下り過ぎた。この二つと善良相な、と言へば言へない事もない目皺とが關聯して下品な無氣力と奴隸根性を持つ女の肉、といふ感じが焼き付けられた。それは彼が現在女と向き合つて居ても、何處かに擱めない遠い高尚な存在だといふ意識があつた爲に結果が誇張されて感ぜられたものだといふ事は彼自身にもわかつてゐた。これは彼が前にかん骨に缺點があると考へた時より全然違つた感じだつた。彼が彼女の美しさを別個に彼の脳裡に神秘的な存在意義迄付與して偶像化してゐたのは、ロマンチックな戀愛のひがみからではなく、彼の幻視癖から異常な明瞭さを以て形り上げられてゐたのだつた。そして彼はこの偶像の前に自嘲的なひがみに自分を折り曲げてゐた。陰影の微妙な旋律、湧き出る光の白い軟い、かすかな波紋。伏せた目ぶたの上に宿る深い沈靜、そんな物が急に立体的なもの空間を壓迫して容積を保持するものとして眼に映じた、女の肉の重みを眼が感じたのである。抽象的な存在が一瞬の中に彼が今迄肉魂として接して來た女達の中に墜落してしまつた。尤もこの二つの間の相剋は會つた始めから幾分か感じてゐたのであつてそれが彼女の笑の爲に勃發した迄だ。

彼女は顔の筋肉をもとへ戻すと火ばしを取つて何やら灰に字を書き初めた。美しいとは思つたが、前の美しさとは全く性質の違つたものとして感ぜられた。

彼は失望と安易を一時に感じ出した、彼女に對する強い關心もなくなつてゐたが焦慮も感じなかつた。  
「今日泊つて行かない？」

しかし彼はこの間が彼の口を淀みなく滑り出たのをかなり驚いた。彼は獸慾にも餓えてゐなかつたし、彼女と泊りたいといふ慾望はあまりなかつた、何故俺はあんな事を言つたのかなと幾分奇異に思へた。が言つた事を今更取り消す熱もなかつた。彼は返事を待ちながら水の様な平靜といふより無關心を感じてゐた。だが心の一方には氣が氣でないといつた焦慮を全く感じないわけではなかつた。勿論其の焦慮も魯鈍な幾分殘忍性を帯びた好奇心から成つてゐるもので、それが何れに決着したところで甚しい失望とか歡喜とかを結果として伴ふものではなかつた。

彼は女が斷らうとしてもだもだしてゐるのを見ると、幾分意地づくの殘忍性を感じた

「勿論斷らうと思へば後から理由は幾つも出て來ませう。僕はそんな理由は聞いてゐはしない、イエスカノーかどちらかです、」  
酷だなどと思つたが、氣の弱い女に封印をおさへた。女は赤くなつて泣き相な口をして指を組み合せたが結局斷り切れない女だつた。

ふと禿は憂鬱な寂寥に沈み出した。俺は何をしてゐるのか。俺は自分がいぢめ得る對照を見出したので憐むべき俺の殘忍性を振り廻してゐるのぢやないか。

翌日彼は晴れた空の下を歩いてゐた。彼は自分の無氣力を極度に呪つた。焦燥、後悔、悲哀といつたものが彼を頭から壓し付けてゐた。かみしめられる様な苦痛を抱きながら日光の下を、憑かれた様に歩いてゐた、それは、責任感とか道德意識などから來るものではなかつた。他人の事を考へてゐる程の餘裕もなかつた。自分がたまたまなく悲惨な小さな存在に見えたのだ。彼の胸の焦燥と不安が波紋をよがく様にひろがり出した。昨夜女が泣いた事は彼の心に愛の一要素となるかも知れないセンチメンタルな憐みをかき立てるだけのもなかつた。彼は考へを吐き捨てる様に唾を吐いた。

過剰な光線の下に彼は萎縮し出した。安つぽく光るトタン屋根と塵埃のぼくつく道路の太陽の光線を吸つた黄色な色彩が手術室のメスと腫物から吹き出る生々しい膿を聯想させた。俺には戀する氣力なんてなかつたんだ。憤激とも絶望ともつかぬものがかたまりとなつて喉元に打上げて來た。その塊を押し下げ様として、彼の喉は伸縮したがごみつぽい道にぼろぼろ涙を落すと狂暴に泣き出した。俺の何處に生きる價值があるんだ。

其夜更彼は泥酔して歸つて來た。そして下宿のきいぎい鳴る梯子に二三段登りかけてやつと自分が下宿に歸つたのだといふ事を意識した。激しい努力で二階に上ると仰向けに倒れた。彼を乗せた地面が蓄音機の盤の様に旋回し出した。彼の脊中が吸ひ付く様に扁平にひろがつて行く様に思へた。痺れが神経を蝕む様に匍ひ上つて來た、天井の木目が見えない様に旋回してゐるにかならず、頭蓋骨の一點が旋回の中心の様に靜止して眼の底にやき付いた。目ぶたを食ひしぼる様につぶるとひくひく痙攣する

まぶたの裏にしみひろがる、緑色の渦の旋回する暗黒の中に、頭蓋が白く浮き上つた。

彼はふらふら立上ると尻で階段を下りた。そして闇の中を游ぎ出した。兩脇で頭を挟んで。

「俺は、俺は、俺は、」

とつぶやきながらそして自分の聲で僅に意識を呼び醒されるとふと立止つた、そしてどろんとした眼を掘えた。

「俺がどうしたんだ」

むつりかうつぶやくと、又前にのめり出した。そして彼は何處までも歩き續けた。

x

x

x

x

x

翌日彼はどぶから溺死体となつて上つた。

「禿は自殺したんだよ。彼奴は強度の抑鬱性悲觀症にかゝつてゐたんだ。」

西村が説明して廻つた。

「馬鹿な。奴に自殺が出来るもんか。酔ひどれてはまり込んだのだ。(恐しい自己執着を持つてゐた男だつたから)。自分に癪癪を起して泣き喚いてゐたがあれで執着と焦燥は何時も持つてゐたらしい。可哀相な奴だ、だが結局今死んでかへつて幸福だつたかも知れないよ。どうせ破滅すべき人間だつたから」

村岡が言つた。